

畜産

事例で学ぶ



事例を紹介
ABLを取り入れた

畜産ABL 家畜を担保に 融資を受けた事例

令和5年1月

モニタリング等
により経営状況を
自ら早期に把握
できる

公益社団法人 中央畜産会

公益社団法人 中央畜産会

〒101-0021 東京都千代田区外神田2丁目16番2号
第2ディーアイシービル9階
TEL. 03 (6206) 0833

はしがき

畜産経営においては、畜舎等の施設整備や家畜の導入の際に土地などが既に担保に供されています。このため、増頭のための家畜導入などの資金について信用力が不足しやすい状況にあります。

一方、近年、金融分野においては、担保や保証人によらず、融資機関が在庫等流動資産の管理状況等を通じて経営状況を把握し、これを基に融資を行う動産担保融資(asset-based lending ABL)が推進されています。畜産分野においても、家畜等流動資産の管理状況等を通じて経営状況を把握することにより、ABLを活用した資金調達を円滑に進めることが重要です。

本事例集は、本会が平成30年度～令和2年度にかけて実施した「畜産ABL」に関するアンケート調査に協力いただいた融資機関等の中から、実際に畜産ABLを行っている融資機関、畜産ABLを利用して、いる資金利用者に聞き取り調査を行い、融資機関サイドと資金利用者サイドとを一体化させた事例として、説明会や融資機関、畜産関係者が畜産農家等に行かれた時に使用することを目的に取りまとめ紹介したものです。

本事例集が、畜産経営者、融資機関担当者、畜産関係団体担当者、行政庁担当者等畜産分野に拘わる方々に今後の畜産における国際競争力のある畜産経営の発展のため、ご活用いただければ幸いです。

令和5年1月

公益社団法人中央畜産会

目次

調査取りまとめ表

1	畜産A B L現地調査	融資機関取りまとめ表(抜粋)一覧	4
2	畜産A B L現地調査	利用者取りまとめ表(抜粋)一覧	6

事例内容等

事例1	肥育牛経営	北海道・東北・関東管内	10
事例2	酪農経営	北海道・東北・関東管内	12
事例3	養豚一貫経営	九州・沖縄管内	14
事例4	和牛繁殖経営	北海道・東北・関東管内	16
事例5	和牛繁殖経営	北陸・東海管内	18
事例6	黒毛和牛肥育、米、麦の複合経営	北海道・東北・関東管内	20
事例7	黒毛和牛肥育経営	九州・沖縄管内	22
事例8	黒毛和牛繁殖、育成経営	九州・沖縄管内	24

1 畜産ABL現地調査 融資機関取りまとめ表(抜粋)一覧(2)

金融機関	一般担保化の扱い		モニタリング			フィードバック		換価処分	
	一般担保化	対抗要件*	内容	実施者	費用負担	有無	経営改善	実績	ルール
A 銀行	一般担保化していない	原則登記 (法人の場合)	現地確認 牛の飼養動 向、成績集 計表 他	畜産協会	債務者	有 (畜産協会 から)	—	無	無
B 銀行	当初から 一般担保	法人は登記 個人は占有 改定	頭数増減、 異常の有無 (家畜共済 台帳)	営業店職員	銀行	無	—	無	有
C 銀行	一般担保化 していない	牛:占有改定 豚:登記	飼養状況、 繁殖成績、 販売成績	利用者 又は 外部	外部の 場合は 債務者	有	経営改善 に結びつ いている	無	無
D 信用金庫	一般担保化 していない	法人は登記 個人は占有 改定	動態管理、 飼養管理 状況	畜産協会	債務者	有	経営改善 に結びつ いている	無	有
E 信用金庫	一般担保化 していない	原則登記 (実績は法人 のみ)	飼養牛在庫 業容	職員	金庫	無	—	無	有
F 農協	当初から 一般担保	法人は登記 個人は占有 改定	販売・導入・ 決算書	JA	JA	無 (指導・ 販売担当 訪問)	—	無	無 (想定し ている)
G 農協	当初から 一般担保	占有改定	現地調査 頭数	JA	JA	無 (畜産部 訪問)	— (畜産部 が指導)	無	無 (想定し ている)
H 農協	当初から 一般担保	占有改定	導入・販売・ 棚卸	JA (畜産課)	JA	有	経営改善 に結びつ いている	無	有 (想定し ている)

※動産譲渡登記制度では、法人のみ登記可。

1 畜産ABL現地調査 融資機関取りまとめ表(抜粋)一覧(1)

金融機関	畜産ABL 開始時期	畜産に対する融資		畜産ABLの規程		畜産ABLの貸付状況	
		現状	スタンス	規程	判断基準	件数	金額
A 銀行	令和元年度	農業融資に占める畜産 残高67%	積極的	有	無	平成30年度 5件	平成30年度 3.4億円
B 銀行	平成23年度	農業融資500件、8割 が畜産	畜特資金・独自の 農業融資制度有	無	有	元年度 4件	元年度 6億円
C 銀行	平成24年度	畜産融資残高260億円	積極的	無	無	平成30年度 3件	平成30年度 3.1億円
D 信用金庫	令和2年度	農業融資に占める畜産 の割合は66%	畜産事業者の資金 需要に対応	有	有	2年度 1件	2年度 2,400万円
E 信用金庫	平成28年	県出荷目標支援のため 積極的に融資	相談があれば対応	無	無	元年度 1件	元年度 1.5 億円
F 農協	平成30年	畜産融資残高1.1億円	積極的	有	無	元年度 2件(継続)	元年度 1,200万円
G 農協	平成29年	畜産融資残高22億円	肥育素牛導入は ABL活用	無	有	元年度 38件	元年度 11.9億円
H 農協	平成28年	畜産融資残高6.5億円	積極的	無	有	元年度 11件	元年度 6.7 億円

2 畜産ABL現地調査 利用者取りまとめ表(抜粋)一覧(2)

利用者名	モニタリング			担保の提供状況 ①新たに提供する不動産無し ②提供できる不動産はあった
	報告事項等	実地確認者	フィードバック	
(有) A畜産	飼養牛の飼養動向、成績集計表、在庫牛等	融資機関 担当者以外	有	②
(個人) B	家畜共済台帳	融資機関 担当者	無	①
(株) C牧場	各部門の入金状況、売上状況、月次試算表、肉豚出荷状況(頭数、金額、格付)	融資機関 担当者	有	①
(個人) D	飼養牛の飼養動向、生産技術、成績集計表、在庫牛等	融資機関 担当者以外	有	②
(合) E繁殖センター	出荷頭数、業況等	融資機関 担当者	無	①
(個人) F	現地調査	融資機関 担当者	無	①(徴求依頼が牛、これまで担保の関係で借りられなかった)
(個人) G	現地調査	融資機関 畜産担当者	有	②
(個人) H	(経営検討会)	融資機関 担当者	有	①
(有) I	飼養牛の飼養動向、生産技術、成績集計表、在庫牛等	融資機関 担当者以外	有	①
(株) Jファーム	飼養牛の飼養動向、家畜共済台帳	融資機関 担当者	無	①
(個人) K	現地調査	融資機関 担当者	無	①
(個人) L	—	融資機関 担当者	有	②
(有) M牧場	(検討会)	融資機関 担当者	有	①

2 畜産ABL現地調査 利用者取りまとめ表(抜粋)一覧(1)

利用者名	経営概況			資金調達	
	営農類型等	規模	従業員	資金使途	借入金額
(有) A畜産	ホル肥育 交雑肥育	肥育牛621頭	4名	牛の導入(銀行分) 運転資金(公庫分)	0.5億円 0.8億円
(個人) B	酪農	乳用牛約70頭 育成牛約50頭	4名	運転資金	500万円
(株) C牧場	養豚他	母豚4,836頭	112名 (豚82名)	運転資金	10億円
(個人) D	和牛・交雑繁殖	繁殖72頭	3名	運転資金	4,600万円
(合) E繁殖センター	和牛繁殖	繁殖59頭	飼育2名	長期経常 運転資金	2,000万円
(個人) F	米・麦・畜産 (肥育)	肥育牛50頭	3名 (専従)	導入	3,000万円
(個人) G	肥育	肥育牛228頭	3名	導入	1億8,200万円
(個人) H	繁殖・育成	繁殖47頭	2名	導入	…
(有) I	交雑種初生肥育、黒毛和種一貫、 ブラウン・ホル雌廃用肥育	繁殖267頭 肥育牛794頭	12名	運転資金	1.8億円
(株) Jファーム	肥育	肥育牛228頭	3名	運転資金	1.5億円
(個人) K	繁殖・肥育	繁殖8頭 肥育牛160頭	3名	導入 運転資金	4,300万円
(個人) L	肥育	肥育牛214頭	2名	導入	1億8,200万円
(有) M牧場	肥育・繁殖	肥育牛228頭 繁殖牛70頭	4名	導入	1.6億円

利用者名	畜産ABLを利用して良かった点 (3年度調査は選択式の調査表を回収、4年度には同じ内容について電話で補足聞き取りを実施)
(個人) G	①従前の肥育牛経営は預託牛制度で行っていたが、農協からの提案を受けて畜産ABLに変わり、利息負担額が大幅に軽減されている。 ②不動産は担保提供済であったが、畜産ABLの活用によりモニタリングによって経営を数値化してもらうことや経営の問題点を指摘してもらうことで信頼ができ、必要な時期に資金を借り入れることができるようになっている。
(個人) H	①母牛を増やしたいと思っていたが、これまでは担保もなく資金調達できなかったものが、畜産ABLで資金を調達でき規模拡大ができています。 ②畜産ABLは、融資枠のように自由に使える感じが良い。 ③モニタリングの結果を経営検討会において、従事するH氏夫婦、農協及び出荷先の肥育経営(同級生が経営する「兄弟牧場」)などと課題点なども含めて情報共有し、経営の改善に役立っている。
(有) I	①畜産協会によるモニタリング結果について(有) Iとa銀行は毎月1回サーベイを受け、生産現場の情報を含めて経営全体の状況を把握している。 ②専門家からデータ的に経営に関する指摘を受け、メインバンクにもそれが伝わっており、課題に早く対処できることに役立っている。 ③自ら経営状況を把握し、金融機関も情報を共有できているので、資金が必要な時期にスムーズに借入可能となっている。
(株) Jファーム	①不動産等の担保余力がなくても借入れができるなど、安定的な資金調達が可能となっている。 ②(上記の言い換えとも思われるが)これまで担保の関係で借りられなかったものが借りられたことにより、規模拡大や所得の増大につながっている。
(個人) K	①不動産等の担保余力がなくても、新たに一定の範囲内で安定的な資金調達が可能となっている。 ②自宅を担保提供することには抵抗があり、担保の関係で借りられなかったものが借りられたことにより、規模拡大や所得の増大につながっている。
(個人) L	①従前の肥育牛経営は預託牛制度を利用していたが、農協からの提案で畜産ABLに変わり、利息負担額が大幅に軽減されている。 ②農協の行うモニタリングによって経営を数値化してもらうことで、必要な時期に資金を借り入れることができるようになっている。
(有) M牧場	①経営内で最も多額な費用である素牛導入資金を一定の融資枠内で安定的に調達できるようになり、資金繰りの調整も行い易くなっている。

2 畜産ABL現地調査 利用者取りまとめ表(抜粋)一覧(3)

利用者名	畜産ABLを利用して良かった点 (3年度調査は選択式の調査表を回収、4年度には同じ内容について電話で補足聞き取りを実施)
(有) A畜産	①モニタリングの結果を専門家が評価・経営分析してフィードバックされ、経営の中身を評価してくれることが、経営者にとって参考になっている。 ②経営状況の変動を早期に把握できるため、関係者への相談を早めに行うことが可能になっている。 ③これまで担保の関係で借りられなかったものが借りられたことにより、規模拡大や所得の増大につながっている。
(個人) B	①公庫やJAに比べて資金借入までのスピードが速いのが良い。 また、繰り返し利用することで銀行からの信頼も高まってきていると感じている。 ②設備投資などの多額な資金はJAを通して金利の低い公庫資金を利用している。畜産ABLは金利は高いが運転資金として使えるなど、使分けができています。 ③担保の関係で資金調達に苦労することも多かったが、金融機関側(銀行)からの勧めで畜産ABLを利用でき、画期的な資金調達方法だと感じている。
(株) C牧場	①経営の状況を常にモニタリングされることで、金融機関も経営の状況を把握し、資金が必要な時期にスムーズに借入可能となっている。 ②不動産担保に余力がなかったにも拘わらず、安定的な資金調達が可能になり、規模拡大等が実現している。 ③モニタリングにより経営状況の変化を早期に自分でも把握でき、関係者への相談を早めに行うことができるほか、経営改善にも着手できるようになっている。
(個人) D	①やりたいと思っていてできなかった格納庫の牛舎への改築及び新たな格納庫の建設が、畜産ABLで実現できている。 ②畜産協会によるモニタリング結果を金融機関も情報共有することで、自分の技術や能力を説明しやすくなっている。 ③モニタリングにより経営状況を自ら早期に把握できるため、問題が起きる前に関係者への相談や経営の見直しができるようになっている。
(合) E繁殖センター	①県産牛の出荷体制支援の一環として担保がない中で畜産ABLによって資金を調達でき、繁殖牛経営の円滑なスタートがきれている。 ②資金調達方法の選択肢が広がり、設備関係は畜産クラスター事業のリース事業、運転資金は畜産ABLにより調達、と計画的な資金調達ができている。
(個人) F	①以前の資金が毎月返済だったことに比べて、畜産ABLは肥育牛を担保にすることによって金利だけを払い、融資枠のように使えることから、資金繰りが楽になっている。 ②資金調達方法を畜産ABLに変えて、畜産経営のための資金調達ができるようになり、規模拡大、所得の増大につながり、また経営の改善に役立っている。

(有)A畜産への畜産ABLは、a銀行が行ないました。担保の対象は牛のみです。資金の使途は牛の導入資金と運転資金です。

融資を行ったa銀行では、以前から畜産経営に積極的に融資を行っていました。一般的にABLも行っていましたが、令和元年に地元畜産協会な



牛を担保に導入資金と運転資金を融資

a 銀行の畜産 ABL の取組	
① 取扱開始時期	畜産 ABL の専用のルール適用は令和元年から
② 融資スタンス	農業融資に積極的に取り組み、特に畜産が3分の2を占める
③ 畜産 ABL の特徴	令和元年度より、モニタリングを地元畜産協会が担い、換価処分(飼養代行)を地元畜産農協が担うスキームを構築

畜産ABLという金融の仕組みの中で、畜産の専門家である畜産協会が、金融機関とは違う目線で経営内容についてコメントします。この仕組みが、畜産経営からも評価されています。(有)A畜産では、モニタリングによって課題もフィードバックされていると、フィードバックの結果を経営に生かしています。

a 銀行では、融資後に担保である牛の状況をモニタリングしています。新たに構築したスキームに基づき、現場で実際にモニタリングを行うのは畜産協会です(一部地元畜産農協に委託)。(有)A畜産のモニタリングの内容は、牛の飼養動向、成績集計表、在庫牛一覧、出荷牛一覧表等です。モニタリングは毎月行われます。

モニタリングの結果、課題点もフィードバックされる

どと新たな畜産ABLスキームを構築し、新たに畜産ABLに関するルールを定めてからさらに経常的な運転資金、増頭資金の融資が増えています。

a 銀行における畜産ABLは、他の資金に比べて事務手続きは増えますが、金利面などの融資条件は他の資金と変わりません。通常、申込から2か月程度で融資実行されています。(有)A畜産では、相談から借入申込までが約30日程度、申込から貸付決定までが約30日程度でした。代表者は、思っていたより短時間で融資を受けられた、と感じています。

POINT 1

・不動産担保がなくても資金調達が可能になった
担保の関係で受けられなかった融資を、金融機関から畜産ABLを勧められて受けられることになり、規模拡大、所得増大を実現できました。

POINT 2

・新たな畜産ABLの仕組みを構築
金融機関は、専門家が参加する仕組みを構築し、新たなABLを始めました。

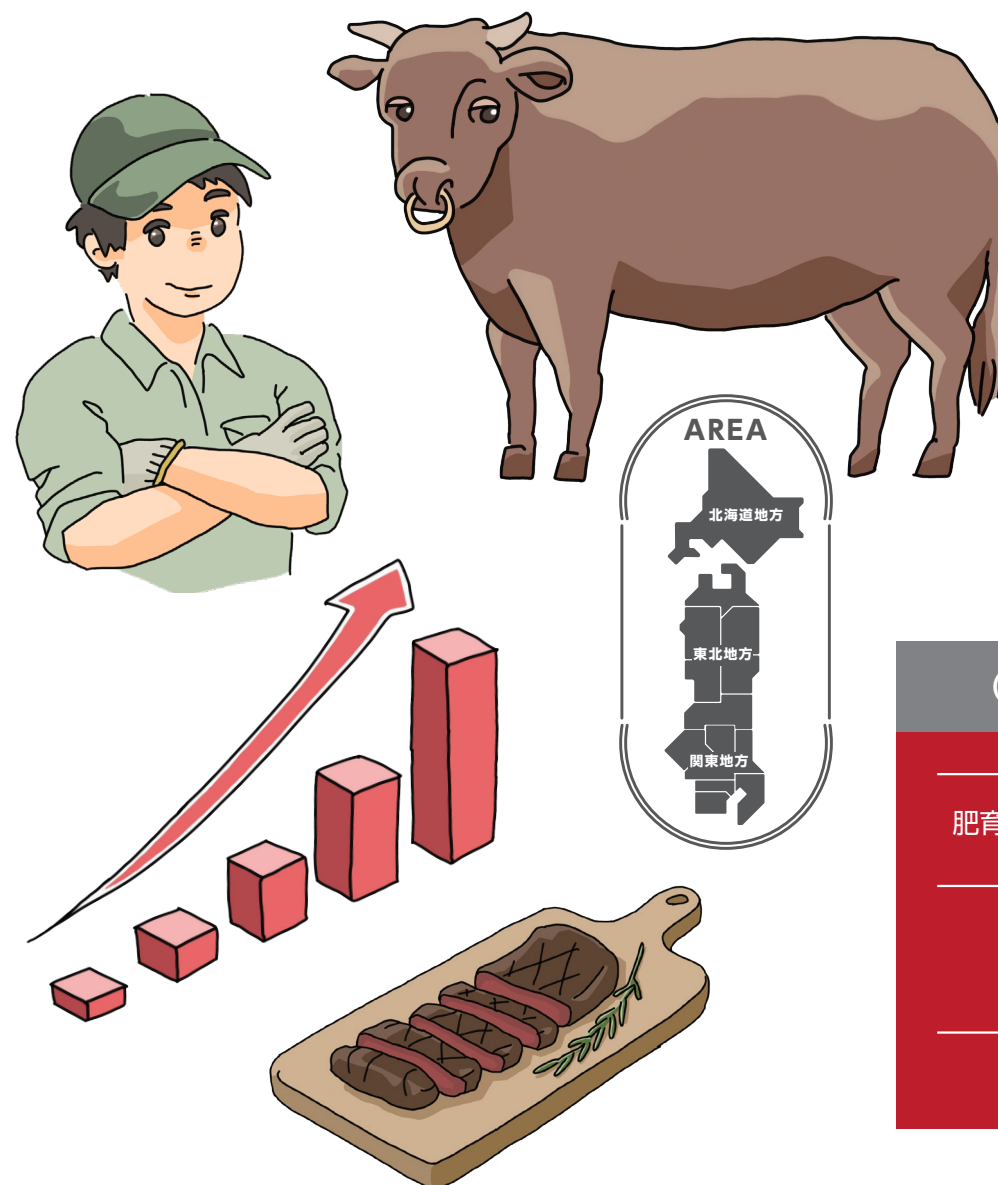
POINT 3

・モニタリングの結果を経営改善に生かす
モニタリングを専門家である畜産協会が担うことで、経営全般の内容を客観的な目線でチェックでき、フィードバックの結果を経営改善に生かしています。



事例

1



(有)A畜産の経営概況

営農類型等

肥育牛(ホル肥育、交雑肥育)

経営規模

肥育牛621頭
年間出荷頭数387頭

従業員

4名

牛の導入資金と運転資金を畜産ABLで調達 担保の関係で資金調達できなかったものが 畜産ABLで調達でき 規模拡大、所得増大

利用者から見た畜産ABLの良かった点

- ①モニタリングの結果を専門家が評価・経営分析してフィードバックされ、経営の中味を評価してくれることが参考になっている
- ②経営状況の変動を早期に把握できるため、関係者への相談を早めに行うことが可能になった
- ③これまで担保の関係で借りられなかったものが借りられたことにより、規模拡大や所得の増大につながっている

新たな資金調達により
規模拡大、所得増大

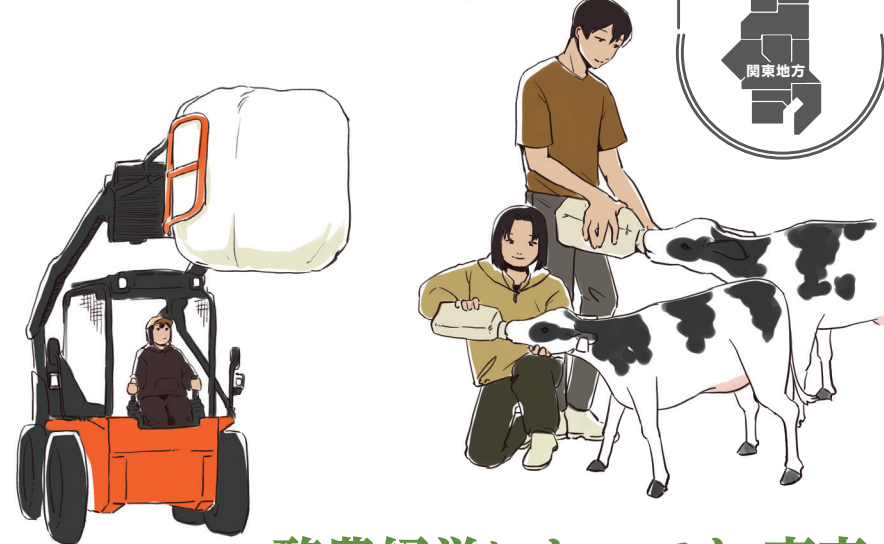
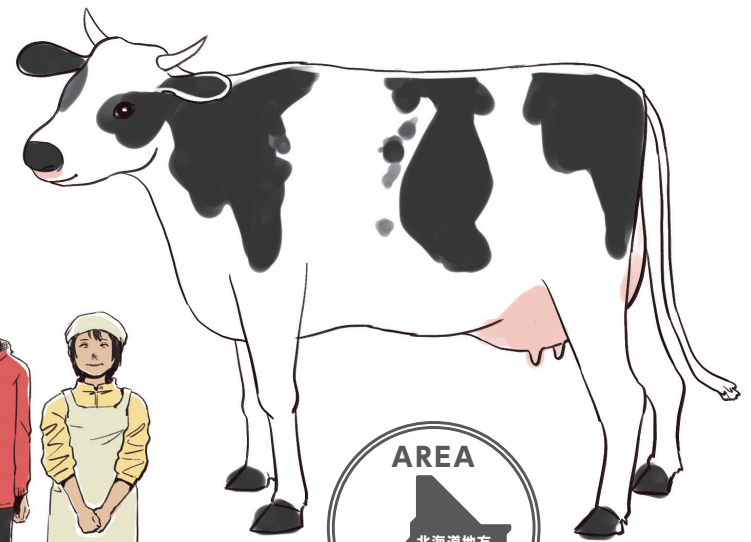
(有)A畜産ではa銀行の畜産ABLを利用する以前から政策金融公庫の畜産ABLを利用していました。(有)A畜産がa銀行の畜産ABLを利用することになったきっかけは、政策金融公庫の資金を利用して新たに牛舎を建設している様子を見ていたa銀行の担当者から、運転資金等でa銀行がお役に立てることはありませんかと話しかけられたことによるものです。

畜産ABLを利用して良かった点として、次の3点を挙げられています。



事例

2



B氏の経営概況

営農類型等

酪農経営

経営規模

乳用牛約70頭
育成牛約50頭
年間生乳出荷量約600t

従業員

4名

酪農経営においても 畜産A B Lの利用が可能
畜産A B Lによる資金調達はスピードが早い
金融機関にとって難しい担保処分は外部に委託

利用者から見た畜産 ABL の良かった点

- ①政策金融公庫や JA に比べてスピードが早いのが良い。繰り返し利用することで銀行からの信頼も高まってきたと感じられる
- ②設備投資などの多額な資金は JA を通して金利の低い公庫資金を利用している。畜産ABLは金利は高いが運転資金として使えるなど、使分けができる
- ③担保の関係で資金調達に苦労することも多かったが、金融機関側からの勧めで畜産 A B L を利用でき、短期的な資金調達方法だと感じている

畜産 A B L による資金調達は
スピードが早い

牧草地 12 ha を持ち、乳用牛約 70 頭、育成牛約 50 頭を飼養する酪農家の B 氏にとって、畜産 A B L を利用して最も良かった点は、スピードが早いことです。審査などに時間がかかる設備投資などの多額の資金調達は、金利の低い制度資金を利用するようにしています。運転資金は畜産 A B L、設備資金は制度資金と、忙しい中で資金調達方法を工夫しています。

b 銀行の畜産 ABL の取組

- ① 取扱開始時期
平成 23 年頃から開始。平成 19 年に流動資産保証制度が始められ、動産担保という括りからみれば畜産でも対応できるのではないかと検討を開始した
- ② 融資スタンス
独自の農業向融資制度を設けているほか、近隣の銀行では取り扱っていない畜産特別資金を扱うなど、農業融資、特に畜産経営の資金需要に対応している
- ③ 畜産 ABL の特徴
担保評価は当初外注していたが、現在は行内で行いスピードアップを図っている。モニタリングは毎月頭数確認をし、換価処分は酪農協に委託している

家畜の評価を外注から

行内実施に変えてスピードアップ

畜産 A B L では、家畜の評価手法、モニタリングの実施、担保の換価処分が課題となります。

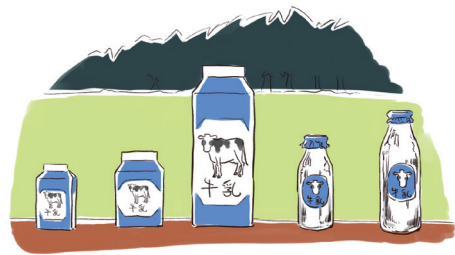
一般的な A B L を進めていく一方で、動産担保という括りから見れば畜産も対応できるのでは、と検討を開始しました。畜産への融資には力を入れており、内部の手続等も整備して、畜産経営に対して担保保全が可能な畜産 A B L の取扱いを開始しました。B 氏は酪農経営ですが、肉用牛経営に対しても畜産 A B L を実施しています。

一般的な A B L に続き

畜産 A B L の取扱いを開始

b 銀行は、流動資産保証制度によって保証協会が動産資産の融資に保証を行うようになったことを契機に、平成 19 年頃から一般的な A B L の取扱いを開始しました。地域金融機関として、過度な個人保証や不動産担保に頼らない資金供給を行うことと、モニタリングを通じてリーションを図ることを目指しています。

従前より農業関係、特に畜産経営への融資に力を入れてきました。独自の農業従事者向け融資制度を設けているほか、近隣の一般銀行が取り扱っていない畜産特別資金を取り扱うなど、畜産経営の資金需要に対応しています。



畜産 A B L のポイント

POINT



POINT 1

- ・酪農経営の運転資金として畜産 A B L を活用
不動産担保などに頼らない畜産 A B L は肉用牛経営での利用が多いですが、評価方法の確立、外部機関との連携などにより、酪農経営でも利用できました。

POINT 2

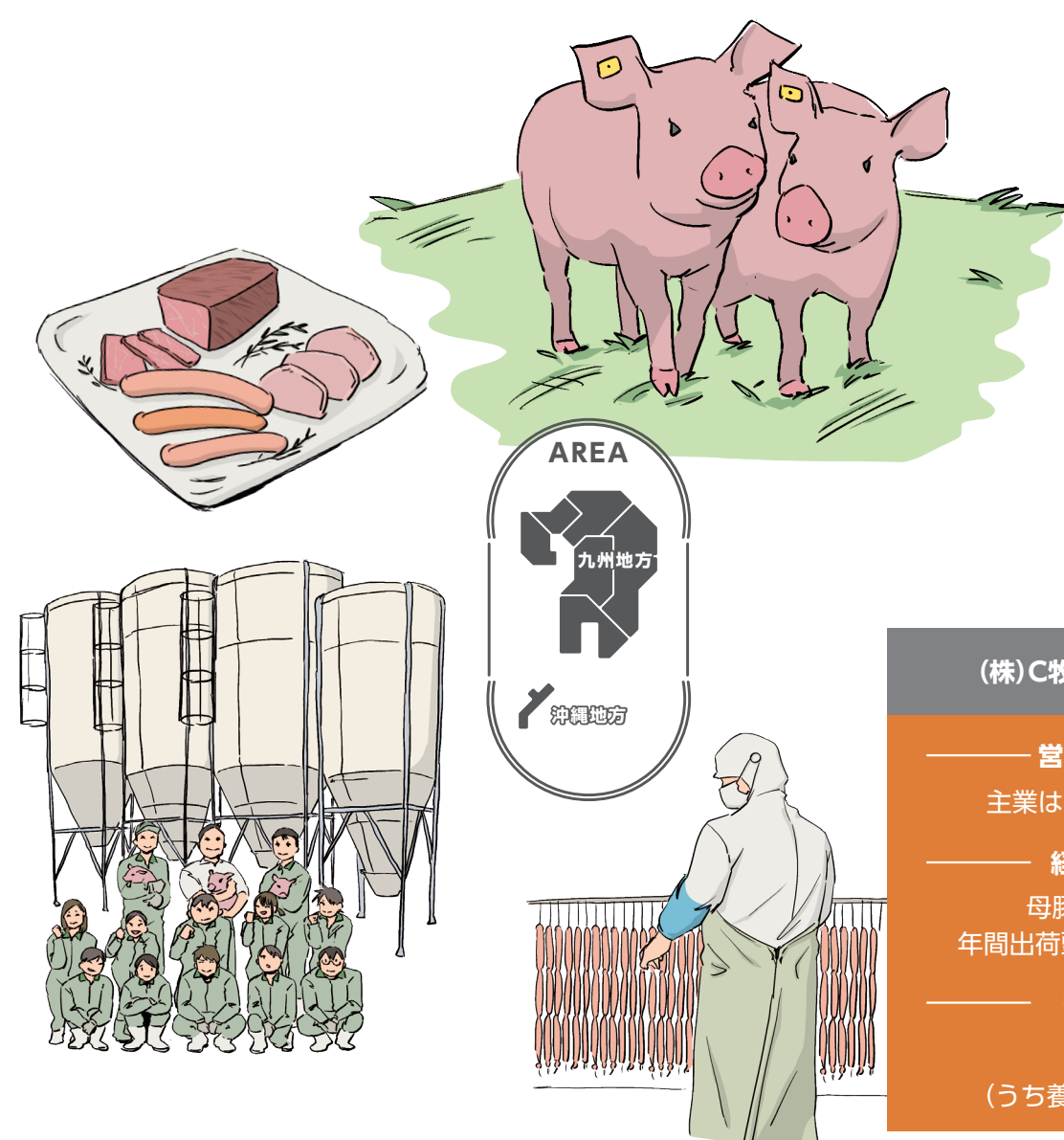
- ・担保の評価を行内で行うことなどにより融資までのスピードをアップ
当初は担保の評価を外注していたが、行内で行うようになって融資までのスピードをアップできるようになりました。スピードアップは、利用者からも使い勝手が良いと好評です。

POINT 3

- ・換価処分については、地元酪農協と連携
金融機関にとって難しい担保家畜の換価処分は、地元酪農協と委託契約を締結しています。



事例 3



(株)C牧場の経営概況

営農類型等	主業は養豚一貫経営
経営規模	母豚4,836頭 年間出荷頭数112,720頭
従業員	112名 (うち養豚関係82名)

養豚経営においても 畜産ABLで運転資金調達 家畜の評価手法は 畜産業界の手法を援用 予想以上の内容だった 経営分析データの提供

利用者から見た畜産 ABL の良かった点

- ① 経営の状況を常にモニタリングされることで、金融機関も経営の状況を把握し、資金が必要な時期にスムーズに借入可能となった
- ② 不動産担保に余力がなかったにも拘わらず、安定的な資金調達が可能になり、規模拡大等が実現した
- ③ モニタリングにより経営状況の変化を早期に自分でも把握でき、関係者への相談を早めに行うことができるほか、経営改善にも着手できるようになった

金融機関が
養豚経営を理解して
くれるようになった

(株)C牧場では養豚一貫経営の資金調達に畜産ABLを活用しています。養豚での利用は珍しいという状況でしたが、銀行からの勧めがあったので「ぜひお願いします」と要望しました。銀行としても初めてのことで相当手間取ったと思いますが、養豚の仕組みの理解に繋がりと、例えば効率の悪くなった農場の処分など、養豚経営の判断への対応が早くなりました。

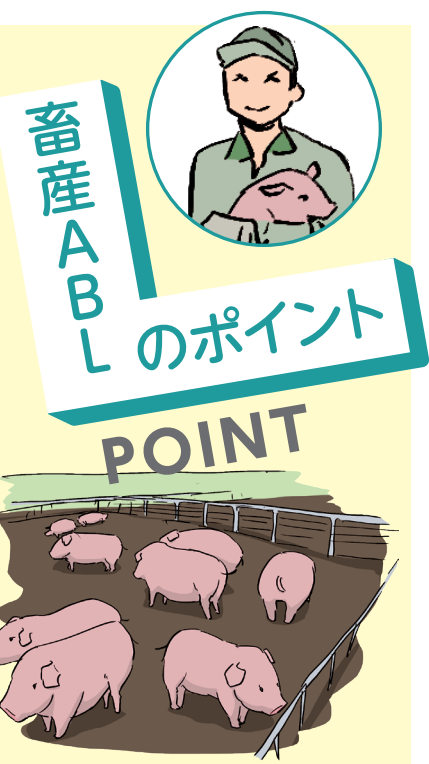
c 銀行の畜産 ABL の取組

- ① 取扱開始時期
平成 24 年頃から開始。県外の畜産ABLの情報などを幅広く収集するなどして準備を進めた。モニタリング管理表の制定など、随時改善に取り組んでいる
- ② 融資スタンス
畜産向け融資には、事業性を慎重に評価したうえで積極的に取り組んでおり、過半が肉用牛経営向け融資となっている
- ③ 畜産 ABL の特徴
通常はモニタリングも行内で行うが、(株)C牧場への融資は外部の地元畜産協会が行っている。結果のフィードバックが、経営改善に結びついている

モニタリングによる分析結果が 予想以上に良いものだった

(株)C牧場のモニタリングの一部は地元畜産協会が行っています。銀行にとって唯一の外部委託となっています。外部委託の場合は、費用は取引先の負担となります。そのため、費用は(株)C牧場が負担しています。費用負担以上の成果があるとして、(株)C牧場では地元新聞に利用を公表しています。家畜を担保提供して資金調達していることを公表することを心配する意見がなかったわけではありませんが、多くの畜産経営に利用してもらいたいという思いで公表されています。

モニタリングは毎月1回営業店職員が行います。経営に関するデータも提出され、畜産協会が四半期に1回経営分析を抱き合わせてフィードバックしていただきます。生産のデータと連動した経営分析結果となっており、また全国平均等外部との比較も含まれた詳しい資料となっています。銀行でも分かっていなかったことが分かり、(株)C牧場にとっても経営に生かせる内容で、導入前の予想以上の内容のことです。

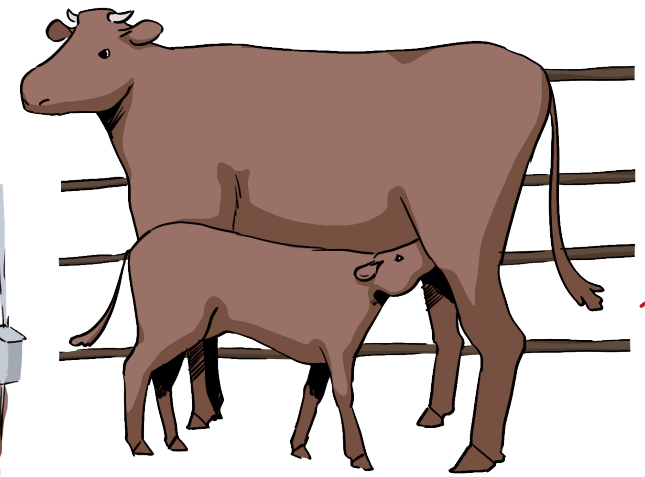


- POINT 1 養豚経営の運転資金として畜産ABLを活用
金融機関にとっては初めてのことでしたが、地元畜産協会などの連携により、養豚経営に対する畜産ABLが行われています。
- POINT 2 担保の評価額は畜産業界の手法を援用
モニタリングの一部を外部委託
金融機関が苦手とする家畜の評価については、畜産業界で行われている手法を援用し、また、モニタリングの一部を専門機関である畜産協会に委託することで、金融機関と取引先の双方にとって評価の高い仕組みを構築できました。
- POINT 3 モニタリング結果を経営分析結果に加工して情報を共有
モニタリングの一部を畜産協会に委託することによって、経営分析と抱き合わせのフィードバックが行われ、銀行でも分からなかったことが分かり、畜産経営にとっても経営に生かせる資料を入手できています。



事例

4



D氏の経営概況

営農類型等

和牛繁殖経営

経営規模

繁殖牛72頭
年間出荷頭数38頭

従業員

3名



考えていた設備投資が 畜産ABLで実現 既存の仕組みを利用して 畜産ABLをスタート モニタリング情報を 金融機関と事業者が活用

利用者から見た畜産ABLの良かった点

- ① やりたいと思っていてできなかった格納庫の牛舎への改築が、畜産ABLで実現できた
- ② 畜産協会によるモニタリング結果を金融機関も情報共有することで、自分の技術や能力を説明しやすくなった
- ③ モニタリングにより経営状況を自ら早期に把握できるため、問題が起きる前に関係者への相談や経営の見直しをできるようになった

**畜産ABLにより
考えていた設備投資を実現**

若い後継者D氏は、格納庫を牛舎に改築し、新たに格納庫を建設したいと考えていました。d信金にその旨伝えたところ、畜産ABLを勧められました。畜産ABLがなければ、牛舎への改築の話は動かなかっただろうと言います。信金の審査の中での牛の評価などについて、畜産ABLのスキームを構成する畜産協会や畜産農協がデータを信金に出してくれるなど、協力してくれました。

d信金の畜産ABLの取組

- ① 取扱開始時期
令和2年12月から開始。政策金融公庫、畜産協会等が構築した既存の仕組みを活用
- ② 融資スタンス
当信金の農業融資はJAを補完することが基本だが、新スキームによる顧客支援は、一歩踏み込んだ支援となる
- ③ 畜産ABLの特徴
モニタリング費用を顧客が負担する一方で、専門機関が行うモニタリングの精度は高く、金融機関が顧客の経営の発展に貢献できる

既存の仕組みを利用して 新たな手法で顧客を支援

d信金は、従来より顧客とのリレーションを強化するためにABLを行うことを考えていました。政策金融公庫と畜産協会等によって構築された新しい畜産ABLのスキームを利用することによって、肉用牛や酪農の顧客の経営発展に貢献したいと考えています。このようなスキームをゼロから構築することは難しかったですが、既存の仕



モニタリングのデータを活用

組みを利用することによってスムーズにスタートできました。

d信金の畜産等農業への融資は、JAを補完することを基本としてきましたが、畜産ABLによって、一歩踏み込んで、金融機関としてのコンサルティング機能を強化するという目的にも合致していました。

既存の仕組みの利用のため、畜産協会から支援を受けるなどして準備を進めました。独自にQ&Aなども作成し、現場の職員が理解を進められるように努めました。D氏の経営は個人経営であり、第三者対抗要件は占有改定によっています。

d信金から見ると、専門機関である畜産協会の行うモニタリングは精度が高いものとなっています。モニタリングを外部に依頼すると、当然費用がかかりますが、今回のスキームでは、モニタリング費用は顧客が負担しています。これは、モニタリングの内容が、担保の動態だけではなく、飼養管理の状況等経営全体となっていることによって、モニタリング機関の畜産協会が経営分析なども行っておりフィードバック、顧客がモニタリングの受益者となっていることによりです。

これまでd信金が行っていたモニタリングの内容は、評価日の直近の試算表徴収と担保物件の時価評価の把握が中心でした。新たな仕組みでは、精度の高い飼養管理状況等の情報も把握でき、顧客の経営状況をより詳しく知ることができています。これらのことから、d信金は、顧客の経営発展に貢献していきたいと考えています。モニタリングに関する顧客の評価も高く、双方に活用されています。



畜産ABLのポイント

POINT

POINT 1

- ・担保の関係で実現できなかった設備投資を実現
担保の関係で実現できなかった設備投資を、金融機関から畜産ABLを勧められて受けられることになり、実施できました。

POINT 2

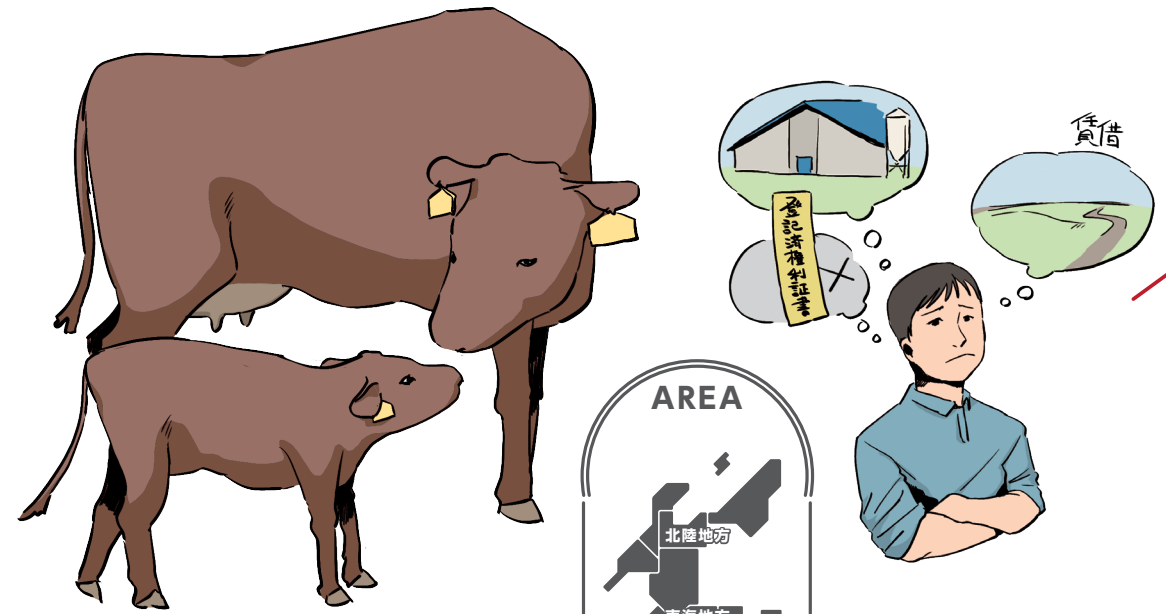
- ・既存の畜産ABLの仕組みを導入して円滑にスタート
関係機関の協力により既存の畜産ABLスキームを導入、d信金にとっては新たなABLの仕組みを円滑にスタートでき、顧客の利用が可能となりました。

POINT 3

- ・モニタリングのデータを事業者、金融機関が活用
畜産協会がモニタリングを行うことで、金融機関は経営に関する精度の高い情報を把握でき、顧客と共にモニタリング結果を活用しています。



事例 5



(合)E繁殖センターの経営概況

営農類型等

和牛繁殖経営

経営規模

繁殖牛59頭
年間出荷頭数今年約20頭
来年40~45頭

従業員

2名

新規事業を畜産ABLと 畜産クラスター事業のリース事業でスタート 県産牛出荷体制を地元信金と取引先が支える モニタリングによる経営状況の把握を重視

利用者から見た畜産ABLの良かった点

- ①県産牛の出荷体制支援事業の開始にあたって、担保がない中で畜産ABLによって資金を調達でき、繁殖牛経営の円滑なスタートがきれた
- ②資金調達方法の選択肢が拡がり、設備関係は畜産クラスター事業のリース事業、運転資金は畜産ABLにより調達、と計画的な資金調達ができた

合同会社E繁殖センターは、県産牛出荷体制支援の一環として、生産基盤を支えるための繁殖牛経営として平成30年にスタートしました。借地上での事業であり、担保提供可能な不動産はありませんでした。地元の信用金庫から畜産ABLを勧められ、資金調達方法の選択肢が拡がりました。長期の運転資金を畜産ABLで調達し、設備資金は畜産クラスター事業のリース事業を利用し、新規事業は円滑にスタートをきることができました。

畜産ABLとリース事業により
新規事業をスタート

e 信金の畜産 ABL の取組

- ① 取扱開始時期
畜産ABLは平成28年頃から取扱いを開始。最初に政策金融公庫から情報を得たことが契機になった
- ② 融資スタンス
県ブランド牛出荷目標に応じて、肉用牛経営を対象に積極的に融資している。取引先から農業参入の相談があり、畜産ABLで支援を行っている
- ③ 畜産ABLの特徴
担保の評価は難しく、評価額は重視せず、経営状況の把握を重視している
モニタリングの一部、換価処分は、外部の管理会社に委託している

モニタリングによる

経営状況の把握を重視

また、農業近代化資金も扱っています。肉用牛経営に対しては、施設整備等は公庫資金及び農業近代化資金、運転資金は畜産ABLで対応することが基本的なスタンスになっています。

e 信金では、畜産ABLの導入に先行して太陽光発電事業などへの一般的なABLを行っています。その準備段階では、他の銀行に視察に出向き、評価会社の研修を受けました。担保は、万が一に備えて徴求するものであり、そのような状況に至らないように、経営状況を把握することが重要です。特に、畜産ABLでは担保物件の評価が難しいこともあり、担保の評価額よりもモニタリングによる経営状況の把握を重視しています。

e 信金が行っているモニタリングの内容は、管理委託会社による毎月の飼養牛在庫報告と信金職員による四半期に1回の実地検査です。換価処分に関しては、管理委託会社に処分を委託していますが、実績はありません。

取引先の農業参入を

畜産ABLで支援

e 信金は、県産牛出荷体制支援の一環として生産基盤安定に貢献することを目指しています。取引先から、農業に参入して繁殖牛経営を始めようとする相談を受けました。土地は賃借、建物は登記物件でもないということから仮に登記をしても担保評価はさほど出ないということになったときに、そのような不動産に担保をつけるよりも畜産ABLで対応した方が良く、という判断になりました。

畜産ABLについては、政策金融公庫から「やりませんか」と話があり、詳しい説明を受けたことが導入の契機となりました。e 信金は公庫資金の受託店でもあり、



POINT 1

- ・不動産担保がない中で新規事業の資金調達が可能となった

新規事業を開始する際に、不動産担保がない中で金融機関から畜産ABLを勧められ、運転資金を畜産ABLで調達できました。

POINT 2

- ・地元金融機関として繁殖牛経営に参入する取引先を支援

e 信金は、県産牛出荷目標に沿って肉用牛経営に対し積極的に対応。取引先が生産基盤安定のための繁殖牛経営参入に際し、畜産ABLで支援しています。

POINT 3

- ・モニタリングによる経営状況の把握を重視

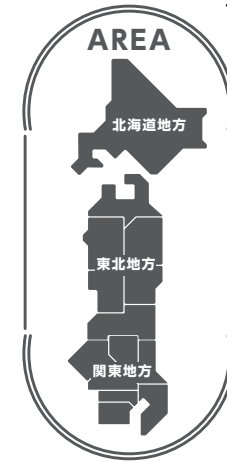
e 信金では、担保の評価額よりも担保のモニタリングによる経営状況の把握を重視しています。モニタリングの一部と換価処分を外注しています。





事例

6



F氏の経営概況

営農類型等
黒毛和牛肥育、米、麦の複合経営
経営規模
肥育牛50～60頭 米・麦作付26ha 年間出荷頭数36頭
従業員
3名

資金を融資枠のように使えて資金繰りが楽に 素牛導入資金を積極的に支援 農協の指導部門と販売部門が頻繁に農家を訪問

利用者から見た畜産 ABL の良かった点

- ① 肥育牛を担保にすることによって金利だけを払い(元金は肥育牛販売時に売却代金で返済)、融資枠のように使えること。以前の資金が毎月返済だったことに比べて、資金繰りが楽になった
- ② 資金調達方法を畜産 ABL に変更して、畜産経営のための資金調達ができるようになり、規模拡大、所得の増大につながり、また経営の見直しも行っている

**畜産経営のための資金を
融資枠のように
使えるようになった**

F氏は、妻と子と共に肥育牛と米・麦の複合経営を行っています。素牛導入資金として、以前は約2年間の償還期限の資金を利用しており、毎月元金返済が必要でした。農協から勧められた畜産ABLでは、販売予定の牛を担保として、金利だけを払い融資枠のように使えるようになり、楽になりました。

複合経営の中で畜産経営のための資金をうまく使うようになり、分かりやすい形で肥育牛経営の規模拡大、所得増につながっています。

f 農協の畜産 ABL の取組

- ① 取扱開始時期
平成30年10月から開始。JAバンクにおいてABLに関する標準的な手法が示されたことを受け、取り扱いを開始した
- ② 融資スタンス
畜産経営への融資は23件、そのうち2件が畜産ABL。肥育牛、豚、繁殖牛を対象としている。畜産ABLは優良経営に対して行っている
- ③ 畜産ABLの特徴
頭数確認は、現地確認からデータでの確認とし、効率化を図った。年4回の現地調査は金融担当が行い、牛や畜舎の状態を確認している。指導や販売部門の担当者が頻繁に出入りしており、連絡を取り合える体制を作っている

素牛の導入を

資金面から積極的に支援

f 農協では、従来素牛導入のための資金は主に農業近代化資金で対応していました。しかし、審査に2か月程度の期間がかかったり、限度額が設定されていることなど自由度が低いと感じていました。農協内で職員から畜産ABLの提案があり、リスクなども整理したうえで導入することとしました。

農協では、素牛導入を円滑に行えなかったことによって経営が傾いた事例があったことなども踏まえ、コンスタントに素牛導入できるようにすることが必要だと認識するようになりました。このようなことから、畜産農家

農協の指導部門や販売部門が

農家を頻繁に訪問

畜産ABLの仕組みや牛の担保評価は、JAバンクにおける標準的な手法に従っています。担保の牛の確認は、当初は頭数も毎月現地で確認していましたが、現在では、頭数は毎月データによって確認しています。現地確認は、現在年4回金融担当が行っています。牛の頭数の他、牛の健康状態、畜舎の状況などを確認しています。換価処分の実績はなく、その方法も特定していませんが、市場への出荷が出荷までの間は組合員に飼育してもらう方法を想定しています。

モニタリングの結果について、農協の仕組みとしてはフィードバックするようにはなっていませんが、指導部門や販売部門の担当者が頻繁にF氏などの利用者のところに入り込んでいます。このようにして、畜産ABLの利用者の情報を農協内で共有しています。



POINT 1

・資金を融資枠のように利用

畜産経営のための資金を、毎月元金返済を行う方法から、畜産ABLを使った当座貸越により調達することによって、資金繰りが楽になりました。

POINT 2

・素牛導入資金を円滑に供給

農協として、肥育牛経営にとって素牛導入資金が重要であると認識し、JAバンクにおける標準的な手法を利用して円滑な資金供給に努めています。

POINT 3

・農協内の指導部門や販売部門も活用したモニタリング

モニタリングは、基本的に金融担当が年4回現地確認を行っています。指導部門や販売部門の職員が頻繁に出入りしており、農家の情報を農協内で共有しています。



事例

7



G氏の経営概況

営農類型等

黒毛和牛肥育経営

経営規模

肥育牛220～230頭
繁殖7頭
年間出荷頭数約130頭

従業員

3名

預託から融資に切り替えて利息負担を大幅軽減
畜産A B Lで農業近代化資金を必要な時期に調達
農協の信用部門と畜産部が連携して農家を支援

利用者から見た畜産 ABL の良かった点

- ① 従前の肥育牛経営は預託牛制度であったが、農協からの提案で畜産ABLに変わり、金利相当額が大幅に減った
- ② 不動産は担保提供済でしたが、モニタリングによって経営を数値化してもらうことで、必要な時期に資金を借り入れることができた

預託から融資に切り替えて
利息負担を大きく軽減できた

G氏は、妻と子と共に肥育牛経営を行っています。以前は預託牛制度で行っていましたが、農協から畜産ABLを使った農業近代化資金の利用を勧められ、切り替えました。事前に利息負担額が軽減されると説明がありました。導入当時はちょうど素牛高の時期でしたが、実際に牛2～3頭分位の利息が軽減されたような効果を感じました。

g 農協の畜産 ABL の取組

- ① 取扱開始時期
平成 29 年頃から開始。預託よりも融資の方が農家の金利相当額の負担が少なく、農林中央金庫等と相談しながら畜産ABLの仕組みをスタートさせた
- ② 融資スタンス
農業関係の融資の過半を畜産が占めている。畜産経営の大半は肥育牛経営であり、素牛導入に畜産ABLを活用している
- ③ 畜産 ABL の特徴
毎月頭数確認を行い、年 2 回融資担当者が現地確認を行っている。農家の経営が悪くなれば、畜産部が経営状況、収支まで含めて指導する

担保は確定日付のない

占有改定で対応

g 農協では、従来肥育牛経営は預託牛制度により行われていましたが、内部から利息負担額の農家負担軽減が必要との意見があり、農業近代化資金制度を活用することになりました。農林中央金庫と農業信用基金協会に相談して、農業近代化資金の担保として畜産ABLの検討を行い、導入を決定しました。

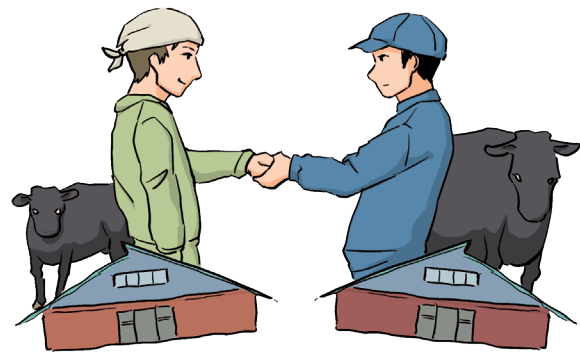
g 農協の農業関係の融資残高は約41億円、そのうち22億円が畜産関係となっています。肥育牛導入に伴う農業近代化資金の融資は畜産ABLを利用することとしています。農業近代化資金制度では農業信用基金協会の保証を付すことになっており、畜産ABLでも基本的に保証が付されています。ただし、農業近代化資金等の限度額2億5千万円を超える部分は預託で対応しており、保

農協の信用部門と

畜産部門が連携した畜産 ABL

担保の牛の評価は、「導入価格＋肥育日数×飼料供給料」等で行っています。モニタリングは、農業近代化資金の毎月の頭数報告と、9月および3月に監査部門が棚卸とともに実査を行っています。換価処分の実績はありますが、子牛生産等を行っている子会社が経営を継承します。

モニタリングの結果について、農協の仕組みとしてはフィードバックするようにはなっていますが、G氏にとっては日常的に接触のある畜産の担当者から受けている感じがおり、その中で課題点も分かるということです。農協としても、農家の経営が悪くなれば畜産部が経営状況、収支を含めて指導することになっていきます。換価処分についても、畜産部を通して子会社を活用することになっており、畜産ABLの仕組みの中に、畜産部の機能がビルトインされています。



畜産 ABL のポイント

POINT

POINT 1

- ・肥育牛経営を預託牛制度から融資に切り替えるのに畜産ABLを活用

農協として肥育牛経営を牛の預託制度から素牛購入への融資制度に切り替えて、畜産農家の利息相当額の負担を軽減しています。

POINT 2

- ・農業近代化資金制度等を活用して畜産農家に安定的に資金を供給

農業近代化資金の担保として畜産ABLが活用されています。畜産農家にとっては不動産担保がなくても、また経営状況がモニタリングによって数値化され、必要時期に資金調達が可能になっています。

POINT 3

- ・モニタリングにおける畜産部の機能の活用

モニタリングにおいて、畜産農家の経営が悪くなれば畜産部が指導し、また畜産農家側から見ると畜産部からモニタリング結果のフィードバックを受けている感じで、畜産ABLにおいて畜産部の機能が活用されています。

h 農協では、JAバンクにおいて「ABL 対応型資金」が創設されたことを受けて、畜産 ABL をスタートさせました。農協内で、債権対策課から、畜産農家の助けになれば、という思いから始まっています。

農協の農業関係の融資残高は約20億円、そ



畜産 ABL で課題となる家畜の評価については、特に規程等は定めずに一般的な方法によっています。モニタリングは、システムにより導入・販売・棚卸評価額等を管理しています。データは都度確認が可能ですが、畜産課が半期に1度現地確認を行っています。換価処分については、具体的な仕組みは定められていませんが、デフォルト時の対応について想定はされています。現時点で換価処分の実績はありません。

データに整備されたモニタリングの結果は、金融課から「今の成績はこんな感じです」とお知らせしています。また、畜産課からは補助的な立場で技術的なアドバイスを行うなど、両課で連携をとってフィードバックしています。H 氏の経営検討会には、債権対策課（金融担当）、畜産課が参加しており、技術面の課題点も含めた検討が行われ、経営の改善につながっています。

畜産農家が利用しやすいように

当座貸越枠を低金利で設定

h 農協の畜産 ABL の取組

① 取扱開始時期

平成 28 年頃から開始。JAバンクにおいて「ABL 対応型資金」が創設され、JA 内の債権対策課から、畜産農家の助けになれば、との発想でスタートした

② 融資スタンス

農業関係の融資の1/3を畜産が占めており、積極的に対応している。運転資金は当座貸越制度として畜産 ABL を、設備資金は農業近代化資金で対応している

③ 畜産 ABL の特徴

家畜の評価は通常の方法で行い、モニタリングは導入・販売・在庫の頭数評価額をシステムにより管理している。無担保融資より金利を低く設定している

モニタリング結果を農協も参加する

経営検討会で活用

のうち6.5億円が畜産関係となっています。成績の良い経営が多く、計画を作成して積極的に対応しています。農家への畜産 ABL の説明においても、家畜を担保に融資を受けられるのは助かる、との意見が出ていました。畜産 ABL の限度額は、原則2億円としています。

農協では、畜産 ABL は牛の導入資金として扱っています。当座貸越制度としており、貸越枠を確保して、農家が利用しやすいようにしています。農協の無担保のローンと異なり、家畜という担保を徴求していることから、金利は低く設定しています。また、法人、個人ともに第三者対抗要件は占有改定によっています。

POINT 1

・母牛導入に畜産 ABL を活用して規模拡大

担保の関係で資金調達できずにいた繁殖・育成経営が、畜産 ABL によって、希望していた規模拡大を果たしています。

POINT 2

・金融担当課と営農担当の畜産課が連携して充実したモニタリングを実施

モニタリング結果はデータに整備され、金融担当課からフィードバックされます。現地確認は営農担当の畜産課が行い、連携して畜産経営を支えています。

POINT 3

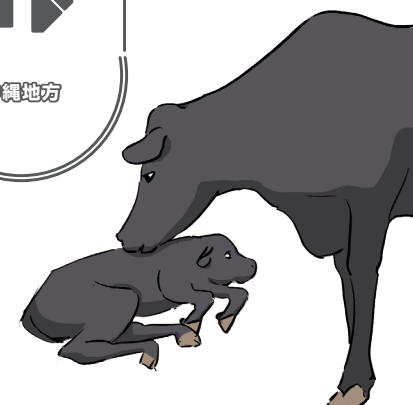
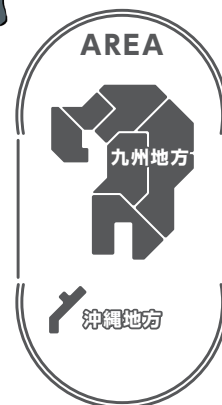
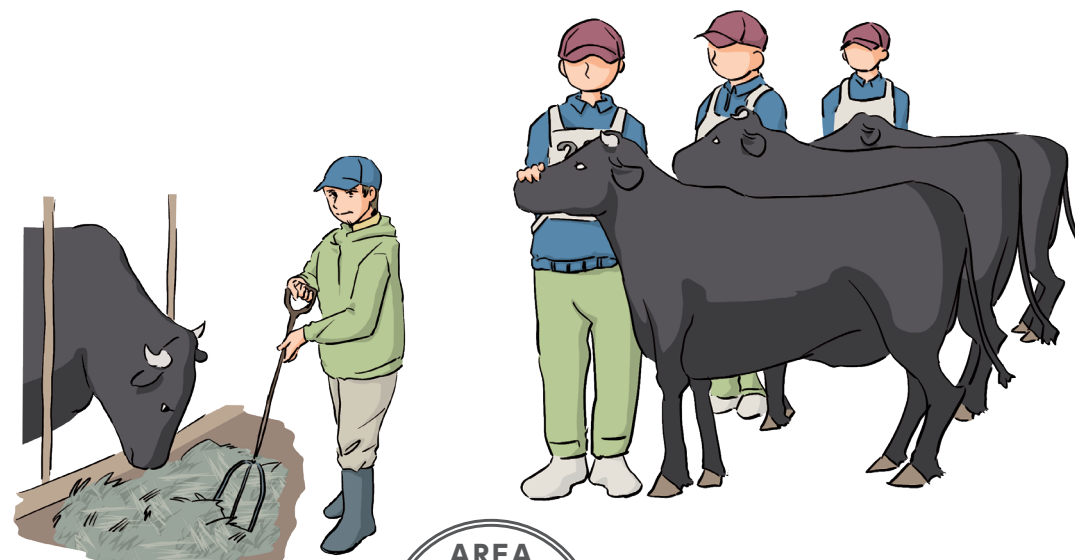
・モニタリング結果を経営検討会で情報共有、経営改善に生かす

データとして整備されたモニタリング結果は、H 氏の経営、農協（金融、営農）、H 氏の出荷先の肥育牛経営が参加する経営検討会にフィードバックされています。そこで、経営上の課題点も含めた検討が行われ、経営改善に生かされています。



事例

8



H 氏の経営概況

営農類型等

黒毛和牛繁殖、育成経営

経営規模

繁殖牛47頭
年間子牛(9~10ヶ月齢)
出荷頭数約60頭

従業員

2名

畜産 ABL を活用して繁殖牛で経営が規模拡大 農協の金融、営農が連携してモニタリング実施 モニタリング結果を経営検討会で活用

利用者から見た畜産 ABL の良かった点

- ①母牛を増やしたいと思っていたが、これまでは担保もなく資金調達できなかったものが、畜産 ABL で資金を調達でき規模拡大できた
- ②畜産 ABL は、融資枠のように自由に使える感じが良い
- ③モニタリングの結果を経営検討会において、従事する H 氏夫婦、農協及び出荷先の肥育経営（同級生が経営する「兄弟牧場」）などと課題点なども含めて情報共有し、経営の改善に役立っている

夫婦で黒毛和牛の繁殖・育成経営を営む H 氏は、母牛を増やして規模拡大したいと考えていました。しかし、土地や建物はあっても担保価値はなく、資金調達できませんでした。農協から畜産 ABL の話を聞き、それを利用することによって資金調達ができ、規模拡大を果たしました。資金を融資枠のように使える感じであり、毎月の牛の導入、肥育素牛の出荷、資金の流れなどを経営検討会で情報共有しており、経営の改善にも役立っています。

不動産担保がなくても
資金調達ができた
規模拡大できた